# 『明月記』における瘧疾の検討

日本医史学雑誌第三十三巻二号
昭和六十二年四月三十日発行　昭和六十一年十一月十九日受付

中村　昭

## 一、はじめに

瘧疾（マラリア）は現代の日本人の記憶からは薄れかけているが、過去においては重要な疾病であった。鎌倉時代の著名な歌人である藤原定家の日記『明月記』を読むと、定家本人や近親者、知人の瘧の病状が頻繁に記載されている。瘧病或は発（おこ）りという名称で書いているが、その記述の内容からそれは三日熱マラリアであったことは明らかであり、それについて考究することはわが国の疾病史の一端を明らかにする上で意義があると思われる。定家を中心としながら瘧の症状の多様性についても論述して見たいと思う。なお、本論文は昭和六十一年十月の例会において報告した内容に更に検討を加えたものである。

## 二、瘧疾（マラリア）小史

マラリアは人類の有史以来現代に至るまで最も重要な疾病の一つである。Hippocrates[1]は三日熱、四日熱、毎日熱について既に周知の疾病の如く記述している。また古代ローマの Celsus もマラリアについて詳細な記述を残しているといわれる[2]。古来イタリア半島はマラリアの浸淫地帯であり、古代ローマ帝国の滅亡もマラリアの猖獗と関係があるといわれる程

である。マラリアという言葉も悪い空気（瘴気）という意味のイタリア語に由来する。マラリアは近代まで熱帯のみならず温帯地域にも濃厚に蔓延していて、十九世紀中頃のロンドンの病院の患者のうち、数％は常にマラリアで占められていたという。[2]

翻って東洋を見ると、中国の前漢に成立したといわれる『黄帝内経素問』[3]には瘧論篇、刺瘧篇があり、瘧の病理、病型、病状、治方について詳細に記述している。それ以後の中国医書においても瘧は常に重要な部分を占めている。[4]

わが国では奈良時代の医疾令の中に瘧という病名があり、[5]当時から知られていたことがわかる。また、平安時代前期の漢和辞典である『和名類聚抄』[6]では瘧にエヤミとワラハヤミの二つの訓をつけ、二日で一発すると説明しており、わが国に存在した三日熱の実際を知っていたように思われる。エヤミというのも瘧が当時の重要な疫病の一つであったことを物語っている。また、ワラハヤミというのは瘧が風土病として浸淫している地帯では成人には大体免疫ができていて、主として小児に定型的な症状が見られたためについた名称と思われる。[7]但し成人も罹患しないわけではなく、免疫は不完全なものである。[8]『明月記』でも瘧は大体小児期に初発するという認識があり、成人してから初発した場合には経過が長引くということも定家は書いている。

平安時代の医学全書である『医心方』[9]には多数の中国医書を引用して瘧の病型と薬方が記されているが、当時のわが国の医療の実際はこれとは大分懸隔があったと思われる。『源氏物語』[10]には光源氏がワラハヤミに罹った挿話が述べられているが、治療は祈禱に頼っている。『明月記』でもそれは同じである。また、定家の息子為家の後妻である阿仏尼が書いた『十六夜日記』[11]にもワラハヤミを病んだという記述があるが、念仏で熱が下ったと書いている。

下って安土桃山時代のことになるが、服部氏[12]によると、山科言経が大坂で開業していた時の患者のうち瘧が七％を占めていたという。これは上述の十九世紀のロンドンのマラリアの率よりやや多い程度であり、ほぼ一致する。偶然の符合であろうが興味がある。同じく安土桃山時代の奈良で書かれた『多聞院日記』[13]にもオコリという病名が多出することは筆者

が前に発表した。[14] この頃はもう瘧に対して種々の漢方薬が使われていた。

ヨーロッパでは十七世紀に南米からマラリアの特効薬であるキナ皮が導入され、熱病はキナが効くものと効かないものとに分類されるに至った。しかし、真に近代的なマラリア学の成立はマラリア原虫とそれを媒介するアノフェレス蚊の発見に待たねばならなかった。すなわち、Laveranがマラリア患者の血液から原虫を発見したのは一八八〇年であり、Rossが Mansonの示唆によってアノフェレス蚊の体内から原虫を発見したのは一八九七年のことであった。[12] わが国では明治三四年（一九〇一）に北海道で最初にアノフェレス蚊が発見され、翌年には京都でアノフェレス蚊が棲息することが確認されている。[15]

その後のマラリア学と公衆衛生の進歩によって温帯の先進国からはマラリアが消滅したが、WHOによるマラリア撲滅計画は成功せず、世界にはなお億をもって数えるマラリア患者がいると推定されている。[16]

## 三、藤原定家の家系[17]と『明月記』について

御子左家と呼ばれた定家の家系は藤原道長の六男長家を家祖とするが、定家の父の俊成の頃には藤原氏でも傍流となっていたのを、俊成は歌道に精進することによって家名を上げた。定家は応保二年（一一六二）に俊成の次男として生まれたが、和歌に長じていた為に家を嗣ぎ、新古今和歌集の撰者にもなり、病苦に悩みながら八十歳（数え年、以下同じ）の天寿を全うした。定家の子の為家は若い時は歌よりも蹴鞠（けまり）に熱心だったが、やがて家学を嗣ぎ、父よりも社交性があった為に父より出世して大納言にまでなった。為家の男子三人は各々歌道の家元になった。すなわち、為家は二条派、為兼は京極派、為相は冷泉派をそれぞれ興した。このうち二条と京極は滅びてしまったが、冷泉家は現代まで連綿と続き、定家自筆の『明月記』を始め、貴重な文書典籍を守り伝えた。

現存している『明月記』は定家十九歳の治承四年（一一八〇）から七十四歳の嘉禎元年（一二三五）までであるが、途中

と晩年の部分何ヶ所か脱落している。冷泉家から外部へ出て保管されている部分もある。現在の刊本『明月記』[18][19]は明治時代に東京大学史料編纂所が冷泉家本と他の写本によって校合したものを底本としている。

『明月記』の原文は当時の変則的漢文体だが、本稿では訓読文にして引用する。（　）内は引用者の注である。以下、俊成、定家、為家の瘧疾に関する記述を拾い出して検討を加えてゆく。

## 四、俊成の瘧疾

治承四年に次の様に俊成の瘧の症状の記載がある。この時俊成は六十七歳であり、これが彼の瘧の初発ではないだろうが、『明月記』はちょうどこの年から始まっている。

「治承四年七月七日

亭主（俊成）一昨夕聊か所悩あり、今日重ねて発らる。凡そ日来家中上下青侍女房等、同時に瘧病並び臥す。病悩極めて以て怖畏あり。」

この時は俊成だけでなく、多数の人の間に瘧が流行したことがわかる。この頃の京都はマラリアの風土病地帯だったと思われるが、そこでも病原体と宿主の相互関係によって、時々流行病の様に瘧が猛威を振ったと思われる。

「同七月十九日

亭主仏厳房を招き受戒す。又一日不動尊を造立し供養す。（しかし）遂に発らる。」

薬物治療は行われず、頼るのは信仰だけであった。

「同七月廿一日

猶発られ了んぬ。」

「同七月廿三日

猶発らる。鳥羽殿御月忌に参じ帰来の間、入道殿（俊成）又悩ませ給ふ。」

このように一日おきに規則的に熱発している。

「同七月廿五日

今朝共に七条坊門に渡らせ給ふ。同時に瘧病又赤痢病、更に以て言ふに足らず。減無く旬日に渉る、毎時右筆する能はず。」

マラリアの合併症として最も多いのは赤痢であるということは近代マラリア学の教科書にも書かれている。[20]

この後は『明月記』の脱落もあり、また定家も結婚後は父と別居したので、俊成の病状の詳しい記載は俊成が九十一歳で死亡する時まで見られない。

## 五、定家の瘧疾

定家もおそらく幼少の時から瘧に罹患したと思われるが、明らかな瘧の発作の記載は三十八歳の時、次の様である。

「正治元年八月十四日

車中より心神忽ち不快、手足継目甚だ痛む。急ぎ退下の後忽ち病悩、酉時（午後六時）以後前後不覚。夜半許の後聊か安堵す。是発心地か。」

心神不快、関節痛、意識昏迷等はマラリアの特徴である。[8][20] 定家もよく心得ている様で、初回の症状でもう是発心地かと見当がついている。

「同八月十六日

発日怖畏あるにより即ち退出帰廬す。未時（午後二時）頗る寤む（熱がさめた）。」

一日おいたこの日は発日であると予想して早退している。熱発する時刻も大体同じであることが知られていた。

「同八月十八日
朝より垣山湯に浴す。本より湯に堪へざるの間、程経るに及ばず四ヶ度上下の間、未一点許艢の中において発り出づ。今日動熱、物として取りて喩ふる無し。」
発りとは狭い意味では発熱期の戦慄のことをいっている。なお、ここでは湯に入って汗を出して熱を下げる試みがなされた様だが、効果がなかった。
「同八月十九日
暁更の後心神聊か安堵す。昨日発殊に為ん方無きの間、臨気窮屈無力殊に甚し。」
「同八月廿日
早旦九条富小路地蔵堂に詣づ。近日発心地に効験有る由人々称ふ。壺の内に入り祈念す。未時その気あり。仍ち急ぎ帰る間、例の如く発り出づ。但し温気事の外宜し。」
「同八月廿一日
咳病又更に発る。心神弥不快。」
マラリアでは気管支炎を起して咳が出ることも多い。
「同八月廿二日
聖尊阿闍梨来たる。終日護身の間、今日無為落ち得了んぬ。感悦極まりなし。
但し咳病此の間術無し、仍ち心神例に復せず。」
阿闍梨とは祈禱をする密教僧であり、解熱したのは彼のお蔭と心から感謝している。しかし、急性の熱発作はおさまってもマラリアはなかなか完治するものではなく、この翌日も症状が次のように尾を引いているが、出勤を命ぜられている。公卿の勤めも楽ではなかった。

「同八月廿五日
咳病殊に辛苦、今朝より大略食らはず。目眩き術無しと雖も、此の仰せの上は是非を申す能はず。」
マラリア原虫が体内にいれば再燃することもあるし、また再感染することもあり、風土病地帯にあっては慢性マラリア症に移行することが多かった。[21] そうなると定型的な症状を呈しなくなり、マラリアかどうか判然としなくなる。しかし、この翌年の定家の次のような症状は慢性マラリアの症状と解することが可能と思われる。
「正治二年三月廿三日（三十九歳）
巳時（午前十時）京を出で嵯峨に向ふ。病気不快と雖も沐浴の為なり。今夜宿る。沐浴の間汗大いに出づ。心神猶甚だ不快。」
「同三月廿四日
風病猶不快、心神甚だ悩む。」
「同十月十日
夜前より心神甚だ悩む、咳病か。」
「同十月十一日
夜より膝股大いに痛む、忽ち行歩する能はず。驚き奇しと雖も扶けられて車中に載り、巳（午前十時）一点参内す。」
慢性マラリアはまた仮面性マラリアともいわれ、この様に突然神経痛の症状を現わすことも屢々あるといわれる。[20]
「同十月廿九日
連日窮屈、病身誠に以て辛苦。巳時許忽ち振ひ出づ。今日殊に寒からず云々。身甚だ冷冱、又小温気有り、汗出づ。」
これは軽い発りの症状である。
「同十一月一日

今日昨日殊に発らず。只咳病術無き上、心神窮屈為ん方なし。仍ち此の由を申し、深く以て籠居す。」

「同十一月二日

心神猶悩む、咳病殊に増す。」

頑固な咳が続いている。この定家の慢性咳嗽については、曽てある国文学者が結核性気管支炎だったのだろうかと述べたが、服部氏[22]はこれに反対して、肺結核でこのように咳が続いてしかも大して病状が進行せず、八十歳まで生きたということは納得できず、むしろ喘息の持病があったのではないかと論じられた。しかし、氏はそれにしても『明月記』に喘息特有の呼吸困難の記述が全くないので疑問を残すと述べられた。

筆者はこれをマラリア症状の一環としての気管支炎ととらえたい。これは近代マラリア学でも認められており[8][20]、古くは『素問』では肺瘧という分類をしている。

さて、以上述べた症状は定家の永い生涯のうちのほんの一部分であり、これ以後もくり返し、心神悩乱とか咳嗽、神経痛等の症状に見舞われている。そして自分自身で理解できない病気だと次の様なことも日記に書いている。

「建暦二年二月十五日（五十一歳）

心神猶宜しからず、臥内を出でず。予猶例に復せず、太だ不快。又心得ざる病也。脚気か、風病か。」

「建保元年六月十五日（五十二歳）

此の間心神猶不快、甚だ心得ず。疑ふらく是魔姓の為か。予少年より常に此くの如き病あり。長年に臨むの後、忍びて護身を加へず、態と思ひ入れず、或は念誦し、或は奉公し、之を以て病と為さず。然して冬節を迎ふる毎に心不快、度々又重病に及ぶ。今年身衰へ愁深し……」

これは単なる中流貴族の憂愁ではなく、慢性マラリア症という魔性のなせる業であったというのが筆者の推測である。

## 六、為家の瘧疾

為家は定家の次男として建久九年に生まれたが、その翌年に次に示す様に瘧病の流行に見舞われた。ここで小児と書かれているのが為家であり、小男というのは長男である。他に女の子もいた。

「正治元年七月十一日（二歳）
未時許小児病悩。日来小女毎日発る。
但し近日天下一同病悩。」

わが国にあったのは三日熱であり、毎日熱（熱帯熱）はなかったと考えられているが、三日熱でも二種の原虫が交互に侵せば毎日発熱することがあった。(20)

「同七月十二日
小児今日別事無し。但し猶申時以後聊か温気有り。」

「同七月十三日
小児今日又未時許発る云々。小男又此両三日温気病悩。天下瘧病計るに勝ふべからず。三人子共に病む。不思議也。」

先ず免疫のない子供が侵されたのかも知れないが、この翌月には定家も前節で述べたように急性瘧疾の発作を起している。

さらに、為家はこの二年後に再燃か再感染かわからないが、発りの症状を呈している。このあたり『明月記』に脱落があり、記載は断片的である。

「建仁元年四月廿五日（四歳）
三名（為家の幼名）発日に依り他行せず。静闌梨護身を加ふ。巳時発り了んぬ。今日殊に重し。」

またこの翌年には次の様に定型的な三日熱の発作を起している。

「建仁二年五月廿五日（五歳）

今日申時許、三名俄に温気あり、程無く寤め了んぬ。発心地疑あり。」

「同五月廿七日

騎馬にて冷泉に向ふ。三名午時許（正午頃）重ねて発るの由聞こゆる間忽ち馳す。只今寤む云々。」

「同五月廿八日

朝小浴、精進の為、巳時許浄衣を着し、八条御精進屋に参ず。

行く螢なれも闇には燃えまさる

子を思ふ涙あはれ知るやは」

「同五月廿九日

今日三名冷泉近きにより祇陀林地蔵に於て試むべき由昨日示し了んぬ。定めてその験無きか。重ねて発るの間、心中更に為ん方無し。」

「同六月一日

三名今日蓮華王院に於て落ち得（解熱した）云々。喜悦極まり無し。」

三日熱は死亡率が低かったのだが、しかし相当恐れられていたことがわかる。また、定家の子煩悩ぶりも相当なものであった。

さらに為家十六歳の時に、次の様に腹部症状と共に冷気温気の交互症状があり、定家はこれを瘧病の始まりかと疑ったが、定型的な発作にはならなかった様である。

「建保元年六月十六日（十六歳）

少将（為家）腹病により参内せず。昨日申時許又冷気有り。身聊か温し云々。若しくは瘧病の始まりか。」

「同六月十八日

少将参内すると雖も腹病猶不快により、暇を賜はって退出す。」

マラリアに腹部症状を伴うことが多いのは事実であり、[8][20]『素問』[3]には胃瘧という言葉も出ている。

## 七、結　び

以上、俊成、定家、為家の症状を中心として検討したが、既に述べたようにこの頃は多くの人が瘧に罹患しており、特に定家の親族に瘧が集中したわけではない。定家は他人の瘧の症例についても見聞するままに屢々書き記している。マラリアは現代人が思っているよりも昔は遙かに重要な疾病であった。しかも完治することなく慢性化する場合が多く、不定症状によって患者を苦しめた。定家の場合にそれが典型的に見られたように思われるので、やや詳しく検討を加えた。

なお、古代中世の日本にこれ程マラリアが多かったということに意外の感を抱かれる向きも多いであろう。近世江戸時代にも勿論瘧疾はあったがそれ程浸淫していなかったように見える。いくつかの要因を考えてみると、第一に昔の日本列島はもっと暑かったのかも知れない。『徒然草』[23]で「家の作りやうは夏をむねとすべし。冬はいかなる所にも住まる。」と言っているのも思い合わされる。

第二には開発が進んで沼沢地が減って、蚊に不利になったということもあるであろう。これには多少の考古学的裏づけもある。すなわち山本[24]によれば、紀元前七千～二千年の地中海沿岸の沼沢地帯の原始農民の骨には多孔性骨過形成症が高率に見られ、これはマラリア有病率が高かったことを示しているが、農業技術が進歩するにつれてこの比率が減少しているとのことである。

第三に、安土桃山時代頃から瘧に対する漢方治療が盛んに行われるようになったということは既に述べたが、それらの

治療が効を奏して患者が減ったのであろうか。中国の何云鶴氏[25]によると、生薬の常山はキナ皮の様に瘧病に特効作用があるということである。しかし、日本の常山は中国の常山と異種であることが日本の木村康一によって明らかにされたということも何氏は述べている。

これらのことを含めてマラリア史はなお今後の研究課題としたい。

## 文　献


(1) 今裕訳編『ヒポクラテス全集』名著刊行会、昭和五三復刻
(2) C. Singer and E.A. Underwood, A Short History of Medicine 2nd ed. 1962, Oxford at the Claredon Press
(3)『黄帝内経素問呉注』山東科学技術出版、一九八四
(4) 李経緯、瘧病史述要、中医雑誌、一九六三、第八号
(5)『令義解』天長一〇（八三三）撰進、寛政一二（一八〇〇）版
(6) 源順『和名類聚抄』延長（九二三～九三〇）撰進、元和三（一六一七）版
(7) ワラハヤミについてこの様な解釈をしている国文学書或は国語辞書は筆者の見た限りでは次の一書だけである。
『大辞典』平凡社、昭和一一
(8) Thomas C. Jones, Malaria; Cecil-Loeb, Textbook of Medicine, 15th ed. 1979, W.B. Saunders
(9) 丹波康頼『医心方』永観二（九八四）撰進、安政七（一八六〇）版
(10) 山岸徳平校注『源氏物語』岩波書店、昭和四〇
(11) 西下経一校注『十六夜日記』学燈社、昭和三八
(12) 服部敏良『日本医学史研究余話』科学書院、昭和五六
(13) 辻善之助編『多聞院日記』角川書店、昭和四二
(14) 中村　昭「多聞院日記に現われる伝染性疾患の検討」第85回日本医史学会総会、一般講演、昭和五九
(15) 田中祐吉『病理総論』吐鳳堂、明治四〇
(16) 鈴木　守、マラリア、日本臨床、一九八五、春季増刊『感染症学の進歩』
(17) 村山修一『藤原定家』関書院、昭和三一

(18)『明月記』国書刊行会、昭和五五復刻
(19) 今川文雄『訓読明月記』河出書房新社、昭和六〇
(20) 宮川米次監修『新撰熱帯病学』南山堂、昭和二〇
(21) 森下　薫『マラリアの疫学と予防』菊屋書房、昭和五一
(22) 服部敏良『鎌倉時代医学史の研究』吉川弘文館、昭和四七
(23) 今泉忠義校注『徒然草』角川書店、昭和四〇
(24) 山本俊一『疫学各論』文光堂、昭和四五
(25) 何云鶴、祖国医学在瘧病治療上的成就和展望、福建中医薬雑誌、第二巻、第四期

(神奈川県総合リハビリテーション事業団　七沢リハビリテーション病院)

# A Study of Malaria in "Meigetsuki"

by
Akira NAKAMURA

Nowadays, malaria is thought of as a tropical disease, but, until the 19th century it was prevalent in temperate zones as well. Aboriginal tertian malaria has been confirmed as existing in Japan using modern epidemilogical methods.

The diary "Meigetsuki" which was written by Teika Fujiwara, a famous poet in Kamakura period, contains many descriptions of malaria-related disorders. The author discribed acute malaria attacks and chronic malarize disorders afflicting Teika's son in "Meigetsuki".

Probably almost everyone suffered from malaria in those days, but medical therapy was not given at all and immunity to malaria is rare. Therefore, many paients became chronic sufferers. Teika himself described many chronic symptoms such as slight fever, anorexia, melancholia, chronic cough, neuralgia and so on. The author presumed such symptoms related to chronic malaria and suggested the importance of malaria in understanding disease informer times.